

紹介

Emma Jinhua Teng,

Taiwan's Imagined Geography: Chinese Colonial Travel Writing and Pictures, 1683-1895,

Harvard University Press, 2004.

私事からはじめるのは恐縮だが、筆者（高嶋）は数年前アメリカに滞在中、週一回、本書の著者エマ・チンホワ・トン（鄧津華）と語学交換をしていた。彼女は自ら Colonial Travel Writing を研究しているといふ、日本語のテキストとして明治期の台湾紀行文を選んできた。そのときは、台湾（に関する）文学の研究者だと思っていたのだが、本書を読んで、二つの誤解をしていたことに気づいた。ひとつは Colonial の主体が日本ではなく清朝であること、もうひとつは彼女がとりこんでいたのが文学研究ではなく歴史であったこと、である。清朝の台湾領有を植民地主義と呼ぶことに疑問を感じる方も多いと思われるが、それ

こそが本書の核心である。以下、本書の内容をおおまかに説明し、最後に本書の位置づけを少し述べてみたい。

本書の主題は、旅行記、絵画、地図などを通して、一七世紀に台湾が清朝に併合されてから一九世紀末に日本へ割譲されるまでの間における、清朝エリートの台湾イメージの変容を描くことにある。台湾の領有は中国という領域の再概念化を引き起こしたが、それを分析するのに使われた概念が、本書のタイトルにある Imagined geography（想像の地理）である。想像の地理とは文化的構築物としての地理、あるいは文字、絵画、伝聞などのメディアを通じて構築された空間認識のことである。「中国」の外部にあった台湾は、一九世紀末には「中国」という領域の中にしつかりと位置づけられるようになった。言い換えるならば、清朝エリートにとって、台湾は彼らの土地からわれわれの土地へと転換したものである。

明の遺臣との抗争のなかで、偶然清朝の版図に入った台湾は、康熙帝の表現を借りるなら「彈丸の地（a ball of mud）」にすぎず、それを得ても益するものではなく、得

られなくとも失うものはない」、不毛な野蛮人の土地であった。知識人たちは台湾原住民を歴史的メタファーによって表象したよりわかりやすくいえば、彼らは時代遅れの人々であるとみなしたのである。その際、過去を理想化し現在を墮落とみる者は彼らに聖人の世の名残りを見出し（原始主義のレトリック）、逆の見方をする者にとつて彼らは禽獣に比すべきものであった（欠如態のレトリック）。共時性を否定する点で西洋の植民地言説と軌を一にしながらも、文化的差異は単なる歴史段階の違いであり、中国に同化可能であると考えていた点で、西洋のそれとは決定的に異なっていた。また彼らの植民地言説は、人種主義的言説と民族主義的言説に分類することができる。前者は原住民は「中国人」と異なる人種（異類）で、中国に同化不能とみなし、後者は両者の差異は文化的差異であり、儒教教育によつて同化可能とみなす。清朝エリートの認識は人種主義から民族主義へとシフトしていくが、清朝の統治理念は常に transformationalism、すなわち後者の立場であった。清朝は原住民を生番と熟番に分類したが、それは文献に記されるような納

税の有無ではなく、文化受容、政治的服従など複数の要素によって決定される流動的な指標であった。この分類は「番界」が画定されることにより、山／平地という空間的領域として視覚化された。「帰化生番」なる呼称は、生番／熟番がすでに服従の有無を意味するものではないことを示している。

恐るべき荒野としての台湾イメージは、一八世紀のあいだに、豊かで恵み深い土地へと変化した。台湾の豊かな植生は、カオスではなく潜在的生産力の証となった。清朝の政策も隔離から積極的な植民地化へと変化しつつあった。その契機のひとつは条約港開港によってもたらされた経済的变化であった。台湾は帝国主義列強の垂涎的となり、清朝は「開山撫番」によって台湾をフォーマルな統治体系に組み込もうとした。それは台湾の土地と原住民を「中国」化することであり、省への格上げを行い、台湾に中国の主権を行使しようとしたのである。その過程で人種的言説が台頭し、半人半獣の生番を力によって手なづけねばならないとする、いわば言説の軍事化という状況が生まれた。清朝は原住民を強制的に

中国の臣民に変える施策をとり、番と民という対立項が崩れ、「番民 (savage and doc)」という概念が生み出された。

台湾でポストコロナ理論の発展が阻害されているのは、台湾がいつ脱植民地化したかに関する合意がないためであるが、それは清朝の帝国主義の存在を認識できないことから生じている。清朝の帝国主義の存在に目をつぶって、はじめて中国と台湾の「再統一」なる考えが浮かび上がる。中華人民共和国では、帝国主義をヨーロッパ人に限定し、清朝のそれは統一、団結という表現で表現されてきた。清朝の拡張主義を帝国主義とみることで、こうした見方を脱自然化することができると同時に、西洋Ⅱ植民者／非西洋Ⅱ被植民者という二分法を不安定にし、植民地主義研究にはらまれたヨーロッパ中心主義に挑戦することが可能になる。他にも図像学、ジェンダー、考証学など論及すべき点は多いが、紙幅の関係で省略させていただく。

清朝の帝国性を問題化した本書は、満洲王朝としての清朝の特殊性を強調する「新しい清史」の流れに属する。日本の読者にとって、著者がとりあげた帝国論はあまり

に欧米中心主義と映るかもしれない。日本では、地域的にも歴史的にも欧米に偏らない帝国論の蓄積がある。ならば、植民地主義はどうだろうか。それは依然として欧米諸国による支配と結びつけられていないだろうか。土地はそれをもっとも有効に利用できるものの手に帰すべきだという藍鼎元の考え(九六頁)は、「そもそも土地は天与の贈にして、国籍の区別を問はず、人種の差別を論ぜず、人類の為に最もよく利用する者に帰す」という新渡戸稲造の言葉と奇しくも一致する。だがそれは偶然というよりは、日本の台湾支配と清朝のそれとの間に本質的な違いがないことを示しているよう。「植民地主義」という言葉にまとうりついた種々の呪縛を排することができれば、それは歴史研究にとつていつそう有効な概念となるであろう。

(高嶋 航 京都大学大学院文学研究科助教授)